目指せ！　さいたま考古マスター

君に挑戦！　これなんだ？？

第 6 回

さいたまの船編

前編　　縄文～平安時代

かいせつ

その1　川をくだり、水平線をこえて･･･。

これなんだ？

次の二つの中からえらんでね！

1. 流木（りゅうぼく）
色や形が厳しい旅路をものがたる？

2. 丸木舟（まるきぶね）
似たものが与野郷土資料館に展示されているよ！

ヒント	縄文時代のものだって・・・。
答　え	２．丸木舟（まるきぶね）

解　説

写真は、南鴻沼（みなみこうぬま）遺跡で丸木舟が出土した様子だよ。南鴻沼遺跡では、４そうもの丸木舟が発掘調査で出土したんだ。これはそのうちの一つ、第３号丸木舟、って呼ばれているものなんだ。

木造の舟には、①材木を組み合わせて造るものと、②１本の木をけずり込んで造るものがあるね。丸木舟は、このうちの②、１本の木をけずって造る船なんだ。このことを頭のかたすみに置きながら、この丸木舟をくわしく見てみよう！

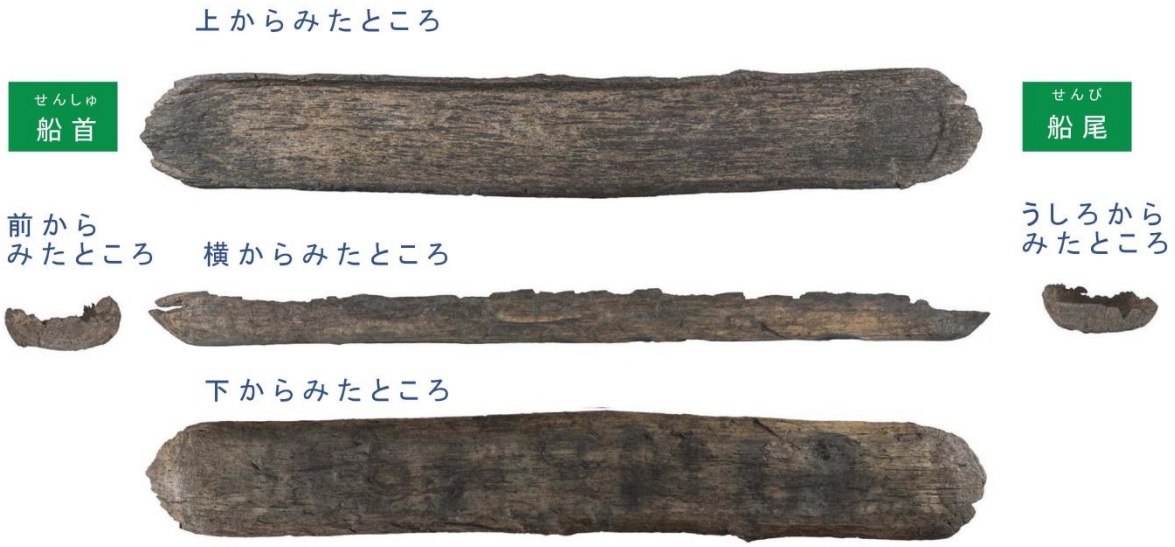
下の図は、この丸木舟をいろんな方向から見た写真だよ。どんなことがわかるかな？

南鴻沼遺跡　第３号丸木舟

目のつけどころで、いろんなことに気付くと思うんだけど、ひびわれがあったり、穴があいていたり、へりがキザギザになっていて、沈没しないのかなあ、とか、くねくねしていて、まっすぐに進むのかなあ、って思った君！この丸木舟を使った縄文人たちが、心配してくれてありがとう！っていってるかもしれないよ。それに、この丸木舟を見ることができることや、丸木舟のつくり方にも関係する、大事なことなんだ。よくぞ気付いてくれました！

今のことをわかりやすくするために、第１回の挑戦で登場した、もう一つの丸木舟（第１号丸木舟）とくらべてみようかな。

南鴻沼遺跡　第１号丸木舟



こちらは、すこし曲がっているけど、うなぎみたいにくねくねしてなくて、全体がだいたい同じはばになっているね。何よりも、大きなひびやあなはないみたいだね。でも、こちらでもへりのところはギザギザになっているね。

同じ遺跡から出土した丸木舟なのに、違っているところがけっこうあるんだね。じゃあ、どうしてそういう違いがあるのかっていうと・・・おっ、「出土した遺跡は同じだけど、二つは時期が違っていて、第１号丸木舟の方が新しくて、丸木舟を造る技術が進歩したからだ」っていう声が聞こえて来たよ。いい視点だね・・・おおっ、「そうじゃなくて、第３号丸木舟の方が新しくて、丸木舟を造る技術がおとろえたんだ」っていう声も聞こえて来たぞ！いいねいいね！同じことを見ていても、正反対の見方ができるんだね。一つの見方、考え方に決めつけないで、いろんな見方、考え方を出し合うことは、とても大切なことなんだよ。その上で、正確な事実をふまえて、どちらの見方が真実に近いのかを、冷静に、客観的に判断することが重要だね。

さて、第１号丸木舟は、出土した土の層の時期と、「放射性炭素年代測定（ほうしゃせいたんそねんだいそくてい）」っていう、科学の力で調べた年代とから、縄文時代後期のはじまりのころのもの、だいたい 3900 年くらい前から 4000 年くらい前に造られたことがわかったんだ。同じ方法で、第３号丸木舟は、縄文時代中期の後葉、

だいたい 4600 年くらい前から 4800 年くらい前に造られたことがわかったんだよ。ということは、第３号丸木舟の方が古くて、第１号丸木舟の方が新しい、っていうことになるね。そうすると、丸木舟を造る技術が進歩した、っていうことになるのかな？

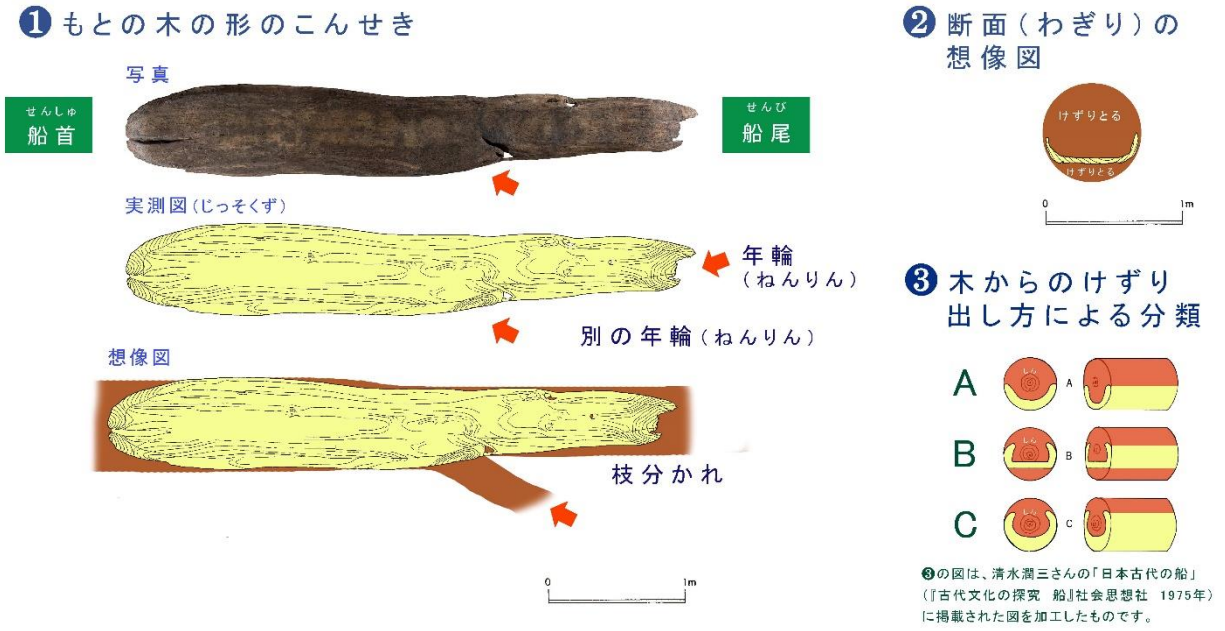
ところがどっこい、そうではないんだよ。第１号と第３号に共通していること、へりのところがギザギザになっている、っていうことは、どちらも元の形どおりではなくなっているっていうことなんだ。木や草でつくられたものは、普通の遺跡では、土の中にうまっているあいだに、くさってなくなってしまうんだ。でも、低地の水分をたくさんふくんだ遺跡の場合には、木や草でつくられたものがくさらずに残っている場合があるんだ。水分の効果で木などをくさらせる微生物の活動がおさえらるからなんだよ。

でも、土にうまるまでの間にいたんだり、くさってしまったところは、どうにもならないね。それに、微生物の活動がおさえられるといっても、まったく劣化（れっか）しないっていうわけではないんだ。へりのところはそういう劣化がおこりやすいところなんだ。へり以外でも、弱いところや早くくさりが進んでしまったところなどは、穴があいてしまったりするんだよ。だから、あながあいていたりすることは、丸木舟を造る技術の問題ではなくて、何千年もの間保存されてきたっていうことと関係しているんだね。

じゃあ、形のちがいはどうかな？どう考えても、第１号丸木舟の方が整った形に見えるよね。でも、これも技術の問題とは違うようだよ。どうしてかっていうと、それはね、丸木舟を造る材料の使い方の問題なんだ。下の図を使って説明するよ。

この図の❶は、第３号丸木舟の下（底）を抜き出したものだよ。一番上が、さっきも掲げた写真、二番目はそれを図にあらわしたもの、三番目はそこから元の木の形を

南鴻沼遺跡第３号丸木舟のいろいろ



を想像したものなんだ。丸木舟の形がくねっとまがって、細くなっていくところにオレンジ色の矢印をつけてあるけど、そこをよく見ると、年輪があるんだ。その年輪は、その部分で完結している、っていうのかな、本体の年輪からは独立しているんだ。ということは、この部分は木の本体から分かれた枝のところだったっていうことになるね。その形を想像したものを、三番目の図では茶色であらわしてあるんだ。だからこの丸木舟は、幹（みき）がまっすぐに伸びているところではなくて、大きな枝が分かれているところを使って造られたことがわかるんだ。

この第３号丸木舟は、はばが一番広いところで５７cmあるんだ。だから、直径が５７cm以上もある、太い木を使っていることがわかるね。そして、年輪をくわしく調べて見ると、２５本から３０本ほど数えられるんだよ。ということは、３０年以上育った大きな木だったわけだね。これがどんな木だったかっていうと、植物の専門家に調べてもらったところ、クリの木だっていうことがわかったんだ。

クリっていうと、秋の味覚の代表格だね。ゆでてそのまま食べてもおいしいし、クリおこわとかクリきんとん、あまグリにマロングラッセ、おっと！忘れちゃいけないモンブラン・・・。う～ん、挙げたらきりがないくらい、おいしい料理やスウィーツがあるねえ・・・・・・。ハッ、いかんいかん、独特の甘みと食感で頭の中がいっぱいになってしまった😅💦

保存にも適したクリは、縄文人にとって、なくてはならない食料資源だったようなんだ。また、道具や家の材料に使われた木の種類を調べてみると、クリの木が使われている場合も多いんだよ。そして、縄文時代の遺跡の土に含まれている花粉化石を調べると、クリの花粉が大量に見つかることがあるんだ。縄文時代の資源利用の研究が深まる中で、クリの重要性があらためて明らかになってきて、縄文人たちはムラの一画にクリを栽培していたらしい、っていうことがわかってきたんだ。大切に手入れをしながらクリの木を育て、秋には実を収穫し、大木に育ったら、材木として活用する。縄文人たちは、資源として管理しながら、クリの木とともにくらしていたんだね。

こういうクリの木だから、食料資源としての役割を終えたときにも、根元から葉っぱの先まで、大切に使ったんだと思うよ。だから、幹のまっすぐのびたところだけではなくて、上の方の、枝分かれして形があまりよくないところも、大切に使ったんだね。第３号丸木舟がくねくねした形になっているのは、丸木舟を造る技術の進歩やおとろえに理由があるんじゃあなくて、多少形は悪くても、材木として無駄なく使いつくす、そういう資源利用の考え方が理由だったんだよ。

さて、さっきの図の❷は、クリの木から丸木舟をどんなふうに造ったのかを模式的に示したものだよ。黄色い色をつけたところは、第３号丸木舟のはばが一番広いあたりの断面図（輪切りにしたようす）なんだ。観察される年輪などから、茶色の円くらいの太さの木をけずって造ったことが想像できるんだ。こういう造り方は、丸木舟の研究を大成した清水潤三さんが、❸でＢ類と分類しているものに当たるよ。

今日のところは、丸木舟のかいせつはこれくらいにしておくよ。最後に、さいたま

市内で丸木舟が出土した遺跡の地図と丸木舟の一覧表をのせておくから、参考にしてね。

全長　４１７cm

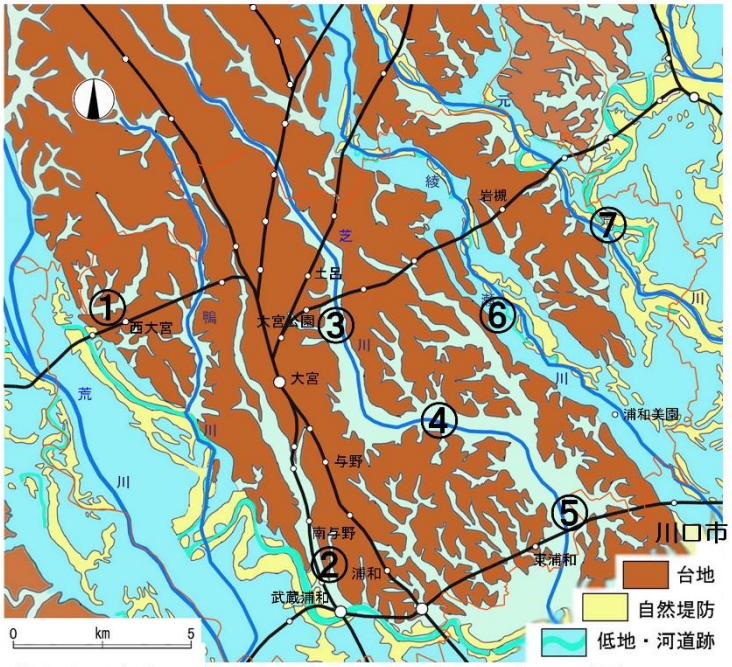
はば　５５cm（船首のあたり）

　　５７cm（中央のあたり）

　　４５cm（船尾のあたり）

■中央区・南鴻沼遺跡（みなみこうぬまいせき）出土

■縄文時代



①大木戸遺跡　②南鴻沼遺跡　③寿能（泥炭層）遺跡

④大道東遺跡　⑤四本竹遺跡　⑥膝子遺跡　⑦村国元荒川底

さいたま市内の丸木舟

番号	渓谷	遺跡（区）	舟番号	残っていたところ	長さ	材質	時期	備　考
1	荒川	大木戸遺跡（西区）	第１号	船尾のあたり	150 cm	クリ	縄文時代後期	
2	荒川	大木戸遺跡（西区）	第２号	ほぼ全体	453 cm	クリ	縄文時代後期	
3	鴻沼川	南鴻沼遺跡（中央区）	第１号	ほぼ全体	358 cm	クリ	縄文時代後期	造りかけかも？ 第１回の問題 与野郷土資料館で展示
4	鴻沼川	南鴻沼遺跡（中央区）	第２号	船首のあたり	約200 cm	クリ	縄文時代後期	
5	鴻沼川	南鴻沼遺跡（中央区）	第３号	ほぼ全体	417 cm	クリ	縄文時代中期	今回の問題
6	鴻沼川	南鴻沼遺跡（中央区）	第４号	先端の一部分	70 cm	モミ属	縄文時代後期	
7	芝川	寿能泥炭層遺跡（大宮区）	第１号	船首のあたり	235 cm	トネリコ	縄文時代中期	
8	芝川	大道東遺跡（緑区）		一方の先端を欠く	444 cm	ムクノキ	縄文時代中期	
9	芝川	四本竹遺跡（緑区）		破片	92 cm	ムクノキ	縄文時代前期以降	
10	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）	第１号	ほぼ全体	488 cm	クリ	縄文時代晩期	
11	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）	第２号	ほぼ全体	700 cm	クリ	縄文時代晩期	
12	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）					縄文時代後期？	
13	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）					縄文時代後期？	
14	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）					縄文時代後期～晩期	
15	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）					縄文時代後期～晩期	
16	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）					縄文時代後期～晩期	
17	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）					縄文時代晩期	
18	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）					縄文時代晩期	
19	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）					縄文時代晩期	
20	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）					縄文時代晩期	
21	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）						
22	綾瀬川	膝子遺跡（見沼区）						
23	元荒川	村国地先　元荒川底（岩槻区）		ほぼ全体	843 cm		（古墳時代）	

※小倉均さんの「丸木舟」（『南鴻沼遺跡（第３分冊）』さいたま市遺跡調査会報告書　第177集）に掲載された表をもとに作成しました。

その2　葉っぱのような、口のような・・・。

これなんだ？

次の二つの中からえらんでね！

1. 口のミニチュア
ドーン！！！…？

2. 船(ふね)のミニチュア
こういうのを流線型（りゅうせんけい）っていうんだね。

ヒント	弥生（やよい）時代に作られた土製品（どせいひん）です。
答　え	2. 船（ふね）のミニチュア
解　説	弥生時代の終わりころにつくられた、土製の舟。船尾の一部が欠けているけど、ほぼ完全な形で残されていたんだよ。全長（写真の左右方向）１２．１cm、はば４．４cm、高さ３．８cmの小型のものなんだ。弥生土器と同じように、粘土で形をつくり、ヘラのような工具でけずったり、みがいたりして仕上げた上で、やはり弥生土器と同じように、焼き上げてあるんだ。 弥生時代から古墳時代には、西日本から東海地方にかけて、舟の形の土製品や木製品などがつくられたり、土器に絵が描かれたりするんだけど、関東地方ではあまり例がないんだよ。 この舟形土製品が出土した遺跡は、岩槻区にある横根野方遺跡（よこねのがたいせき）っていう遺跡なんだ。目白大学岩槻キャンパスのすぐ西側にある遺跡なんだけど、このあたりは台地（だいち）の西のへり、その西側には、はば１５００mの谷があって、その中程には綾瀬川（あやせがわ）が流れているんだ。縄文時代の丸木舟が十数そうも出土した膝子遺跡（ひざこいせき）は、対岸近くの谷の中。そういう立地をみると、川を船で行き来する水上交通と何らかのかかわりがあるんじゃないかなあ、って考えたくなるねえ。でも、今のところはくわしいことはわからないんだ。 今後、調査が進んで、いろいろな情報が集まったり、みんなも研究に参加して、新しい事実の解明が進んだりすると、この舟形土製品がこの遺跡から出土した意味もわかってくるかもしれないね。 ■岩槻区・横根野方遺跡（よこねのがたいせき）出土 ■弥生時代

横からみたところ

前方からみたところ

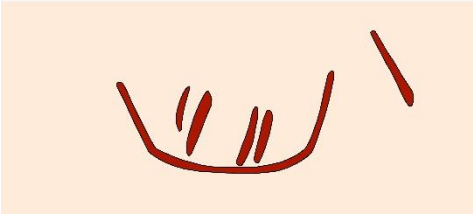
その3　古墳時代の壺(つぼ)。何やら絵が。

これなんだ？

次の二つの中からえらんでね！

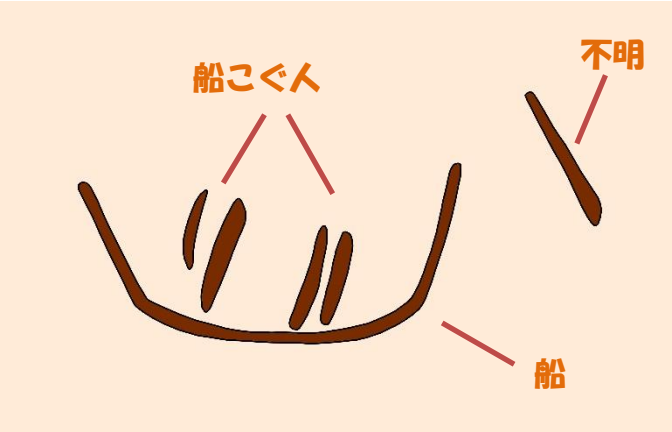
1. おわんとおはしの絵
おわんとおはし？

2. 船と船をこぐ人の絵
人に見える？



ヒント	このころの人は、絵であらわすのはあまり得意ではなかったのかな？
答　え	2. 船と船をこぐ人の絵
解　説	

　これも関東地方では類例の大変少ないものなんだ。船と船をこぐ人を描いたもの、って考えられているんだ。正直にいって、この絵だけを見ていても、これが船と船をこぐ人の絵とは思えないよね。でもこれは、船と船をこぐ人を土器に描く近畿地方などの文化を受け入れて、船をあらわす記号のようなものとして、この土器に刻みこまれたらしいんだ。写実的に船を描写しようとしたわけではないんだね。



　おわんのような形の線が船、平行する二本線が船にのってこいでいる人を表しているようなんだ。右上にあるななめの線は、この土器のまわりにぐるっと付けられている文様なんだ。その意味はよくわかっていないよ。

　この絵が描かれた土器は、壺（つぼ）って呼ばれる形の土器なんだ。本体は丸い玉のような形（「球状（きゅうじょう）」っていったりするよ）、その上の方に、外側に傾いて口が開くんだ。この絵は、その玉のような本体の上側に描かれているんだ。置いた時には一番目立つところだね。

　この土器が出土したのは、古墳時代のはじめのころの方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）。方形周溝墓は、弥生時代から古墳時代の初めの時期に特徴的なお墓の形で、まわりを溝で四角くかこんでいて、四角く（「方形（ほうけい）」）まわり（「周（しゅう）」）をみぞ（「溝（こう）」）でかこんでいるので、「方形周溝墓

（ほうけいしゅうこうぼ）」ってよばれているんだ（方形周溝墓は、第３回の挑戦のときに中央区の上太寺遺跡（じょうだいじいせき）から出土したガラス玉の「かいせつ」の中に出てきていたよ）。

この方形周溝墓は、一番はばの広いところで１６．５ｍもある、大きなものなんだ。ぐるっとまわった溝が一か所だけ途切れていて、中に渡る橋のようになっているところがあるんだけど、この絵が描かれた壺などの土器はそのまわりからまとまって出土したんだ。このお墓にほうむられた人のために行われた「まつり」の時に使われ、そなえられたものと考えられるんだよ。まとまって出土した土器の中には、船の絵が描かれた壺のほかに、近畿地方の土器づくりの影響を受けた土器もふくまれていたんだ。

だから、この方形周溝墓にほうむられた人は、関西地方などの外の世界との交渉に関わるような人だったのではないか―っていう見方もあるんだよ。

■見沼区・篠山遺跡（しのやまいせき）出土
■古墳時代

その4　平安時代のお皿のふた。
何やら文字が。

これなんだ？

次の二つの中からえらんでね！

1.「川津さん」っていう、持ち主の名前
それだれ？

2. 船着き場（ふなつきば）のこと
「津」がつく地名はあちこちにあるねえ。

ヒント	宿宮前（しゅくみやまえ）遺跡から出土しました。ん？どこかで聞いたことのある名前だ・・・。
答　え	2. 船着き場
解　説	**宿宮前遺跡とその周辺**　宿宮前遺跡っていえば、第１回の挑戦で登場した、「めざせ！さいたま考古マスター！」のシンボル、らほつが出土した遺跡だね。 宿宮前遺跡のある桜区宿の周辺から西区島根の周辺、それに桜区大久保領家の周辺にかけての地域は、古墳時代後期から平安時代前期の遺跡が分布しているんだよ。竪穴住居跡（たてあなじゅうきょあと）・建物跡もすごい密度で分布しているし、他の地域ではめったに出土することがない奈良時代の瓦が当たり前のように出土するんだ。さらに、漆（うるし）を使ったり、鉄などを加工したりしていたこともうかがえて、普通のムラとはだいぶ様子が違っているんだ。 奈良時代から平安時代の頃は、瓦は普通の人の家では使われなかったんだよ。瓦が使われるのは、お寺か役所くらいだったんだよ。お寺は、豪族（ごうぞく）などが新しい文化として仏教を受け入れて建てたもの（氏寺・うじでら）と、郡家（ぐうけ）という、奈良時代のはじめに確立した地方行政の役所（足立郡などの郡（ぐん）ごとにおかれたんだ）に付属するものがあったようだよ。 そうすると、宿宮前遺跡の周辺には、奈良時代から平安時代にはお寺か役所のようなものがあったらしいんだね。宿宮前遺跡のらほつは、たった二つしかみつかっていないけど、実際に仏像をまつるお寺があったことを示す重要な物証なんだね。大久保領家にもお寺の跡と考えられる大きな建物跡がみつかっているんだよ。 これらのお寺が、豪族が建てたものなのか、それとも郡家などの役所に附属するものなのかは、まだわかっていないんだ。みんなにも参加してもらって、調査や研究を進め

て行くと、お寺の詳しいようす（たとえば、このあたりに門があって、あのあたりに塔（とう）がたっていた、など）がわかってきて、どういう性格のお寺だったのかが解明されるに違いない！

お寺はどちらかというとわかりやすいことだけど、漆を使ったり、鉄などを加工したりっていうことは、そうしたものを使って必要なものを作る場所、つまり工房があったっていうことだね。そうしたことだとか、広い範囲にわたって非常に高い密度で住居跡などがみつかるということなどから、豪族の館などもあったかもしれないけど、それだけではなくて、郡家などに関係する役所があった可能性も非常に高いっていうことになるんだ。

墨書土器（ぼくしょどき）　そこで、この問題の文字なんだ。これは墨を使って漢字で「川津」って書いてあるんだ。「川津」は「かわづ」って読むんだと思うよ。

こういうふうに土器に文字が書かれたものは、けっこうみつかっていて、こういう土器のことを「墨書土器」っていったりするんだ。書かれた文字は、その土器が使われる場所が書かれる場合と、まじないに関係すると思われる文字が書かれたものがあるんだ。ごくまれに、持ち主と思われる人の名前が書かれる場合もあるんだ。まじないに関係する場合には、書かれた文字に意味がある場合と、文字そのものに力があると考えられた場合があるかもしれないね。だから、文字が書かれた土器が出土したからといって、その場所に日常的に文字を書く人がいたとは限らないんだ。でも、「川津」っていうのは、その土器が使われる場所を書いたって考えられるから、宿宮前遺跡のあたりで墨と筆、それに硯という道具類をそろえて、文字を書ける人がいたっていうことがわかるね。

「川津」　じゃあ、「川津」っていうのはどういう場所かっていうと、この場合は漢字そのものから考えることができるね。「川」は川。これについては説明はいらいね。「津」は一言でいうと、船着き場のことなんだけど、川のこちら側と向こう側を船で渡す「渡し場」をさす場合と、川を上ったり下ったりして人や荷物を運ぶ船が停泊（ていはく）する場所をさす場合とがあるね。

「津」っていう文字がついた地名もたくさんあって、「河津」（静岡県河津町）は「川」と「河」の違いはあるけど、同じ意味の漢字の組み合わせだね。ほかにも、「沼津」（静岡県沼津市）、「大津」（滋賀県大津市）とか、そのものずばりの「津」（三重県津市）もあって、あげはじめたらきりがないくらいだね。こういう「津」がつく地名に共通するのは、港町であること。「大津」は内陸にあるけど、琵琶湖の水上交通の拠点として古くから栄えたところだね。

こういうことや奈良・平安時代の社会のしくみなどから考えると、この「川津」が書かれた土器は、たとえば渡し場で船頭（せんどう）さんが休憩の時に水を飲むのにつかったもの、っていうものではないんだよ。宿宮前遺跡のあたりにあった「津」で、船や荷物、それから「津」の設備や施設の手入れなどを行う場所、いってみれば津管理事務所みたいなものがあって、そこに備え付けられたもの、って考えられるんだ。

宿宮前遺跡のあたりには、そういう事務所（役所の出先機関）があった可能性が高いんだね。船そのものは見えなけど、土器に書かれた二つの文字から、さいたま市をさかんに行きかう船の姿が見えてきたね。ただ、その事務所や「津」の場所、そこでの具体的な仕事の内容なんかは、まだよくわからないんだ。これからの調査と研究が解き明かしていくことに期待しよう。是非みんなも、力を貸してくれたまえ！

なお、「津」とだいたい同じ意味の言葉には、「港（みなと）」「湊（みなと）」「泊（とまり）」「戸（と）」などがあるね。これらの文字がついた地名も全国にはたくさんあるんだよ。そういう文字が使われているところは全てが船着き場に関係した場所だとは断定できないけれど、どんな場所なのかや、歴史をさかのぼってみたりすると、共通点が見えてくるかもしれないね。そういえば、さいたま市にも「大戸（おおと）」っていう地名があるね。しかも市内にふたつもあって、中央区の大戸と岩槻区の大戸だね。

■桜区・宿宮前遺跡（しゅくみやまえいせき）出土
■平安時代

その5　平べったくて、丸かったり・・・。

これなんだ？

次の二つの中からえらんでね！

1.「石けり」
第５回に「石けり」のコラムがあったよ。
※第５回　問題その５の１.

2. 人工の川（運河・うんが）に沈められた土器
角がとれているね。

ヒント	河原の石は、上流だとゴツゴツ、下流だとツルツル。
答　え	2. 人工の川（運河・うんが）に沈められた土器
解　説	これは、宿宮前遺跡の「川津」の土器の出土地点の北側およそ７００ｍのあたりにある、根切遺跡（ねぎりいせき）から出土した土器だよ。出土した場所は、さいたま市民医療センターがある場所。市民医療センターを建てる前に行われた発掘調査で出土したものなんだ。

にもどる　宿宮前遺跡はこちら

この発掘調査では、人工の川、つまり運河（うんが）の跡が見つかったんだよ。運河のかたわらには、その運河の管理に関係していた可能性のある建物跡なんかも見つかったんだ。さきほどの宿宮前遺跡の「川津」そのものなのかどうかはわからないけれど、「津」に関係したものであることは間違いなさそうだよ。もしかすると、こういう港湾施設（こうわんしせつ）は何か所もあったのかもしれないね。

運河の規模から考えて、例えば海も渡れる船がここまで入ってきた、っていうことはちょっと考えにくいね。川の本流を進んだ船からどこかで小型の舟に荷物を積みかえて、その舟がここまで入って来たか、荷物や人を下した小型の舟を安全に停泊させておくための場所だったんじゃないかな。そうすると、この運河の下流のどこかに、人や荷物を積み下ろす場所があり、さらに下流には大型の船から小型の舟に荷物を積み替える中継のみなともあったことが推測できるね。

問題の土器は、この運河の底からまとまって出土したものなんだ。土器は古墳時代後期から平安時代頃までのものの破片なんだけど、どれも角がとれて、つるつるになっているんだ。こういう土器のまとまりが運河の底にいくつもあったんだよ。激しく水が流れているところだと、流れが弱くなるところに砂などがたまる場合があるね。

この運河に埋まった土の中に残されたケイソウ（藻（も）のなかま）の化石を調べたところ、底の方では、水深のある沼のような環境だったけど、一時的に土がたまって湿地のようになり、平安時代のはじめ頃にまた水深のある沼のような環境になったことがわかったんだ。水が流れることもあったようだけど、川のように常に水が流れ下っているっていうわけではなかったみたいだね。

だから、運河に落ちた土器が水の流れの弱いところにたまった、っていうのとは違うみたいなんだ。それで、これらの土器は、布のふくろのようなものに入れられて、

	運河の底に沈められていたんじゃないか、って考えられているんだ。 　では、何のために沈められたのか。水の流れの調節のため、っていう考え方が出されているけど、まだ確証はないんだ。これもこれからの調査と研究が必要だね。 　ここでも船そのものは見えないけど、船が活動した場所そのものが見つかったのはすごいことだね！ 　この運河がどこを流れてどこまでつながっているのか。先の先は、平城京（奈良市）や平安京（京都市）、さらには唐の都・長安や、ペルシャにまでつながっていたのかもしれないなあ。 ■西区・根切遺跡（ねぎりいせき）出土 ■奈良～平安時代